

HIV 感染症は生涯にわたり自己管理を必要とする疾患である。周囲に HIV 感染を伝えてサポートを受けている患者は受診中断率が低いともいわれ、医療者を含めたサポート者の存在は意思決定や長期療養には重要である。

しかし、HIV 感染症に対する誤解や偏見が社会に存在することで、周囲への告知は容易ではない。告知した相手との関係性の変化への懸念や、患者が抱く HIV 感染症の負目など様々な理由があるため、患者が周囲への告知やサポート形成について意思決定していけるよう支援する。

1) 告知に関する自己決定支援

サポート者形成支援のポイントを下記に示す。

- ①患者が病気に向き合えるよう支援する。
- ②現在の身近な人間関係やキーパーソンの有無を確認する。
- ③患者が他者への HIV 感染告知をどのように考え、必要としているか否か確認する。
- ④長期療養生活でサポートを得ることの意義について十分話し合う。
- ⑤告知の対象者や時期、内容など十分に考えられ、その人にとって適切なタイミングでの告知が自己決定できるよう支援する。
- ⑥希望があれば、告知を体験した患者の体験談を聞く機会を調整するなど、当事者の声を聴く機会を設けることも検討する。

2) 告知を受けたサポート者への支援

HIV 感染を伝えられたサポート者は、患者と同様、またはそれ以上の衝撃を受けている可能性がある。また、HIV 感染を打ち明けられたという負担や患者の支援方法などの悩みを抱えていることもある。看護師はサポート者が抱える問題をアセスメントし、患者を支援し続けていけるように多職種と連携して支援する。

- ① HIV 感染症に関する正しい知識を提供する。
- ②医療者はいつでも相談対応できることを保証する。
- ③患者の診察や面談の同席を希望された場合は、患者の同意を得て機会を調整する。
- ④感染機会がある場合は、HIV 検査の情報提供をする。

3) 遺族への支援

最愛の家族を失った悲しみは当然だが、社会の偏見や誤解、親しい身内にも病名を隠して看病を続けたなどの感染症特有の精神的負担を抱える場合があることを忘れずに支援する。

また、薬害エイズ被害者については、はばたき福祉事業団や、国立国際医療研究センターエイズ治療・研究開発センター救済医療室などと連携を図り、必要時、遺族相談事業・患者会などの遺族ケアを活用して支援していく。